

京たなべ・同志社スポーツクラブにおける サークル活動展開の意義と立ち上げおよび運営上の課題

高橋 仁美¹, 来田 宣幸²
坂井 智明¹, 竹田 正樹¹

Significances of developing circle activities and it's tasks in management in Kyotanabe-doshisha Sports Club

Hitomi Takahashi¹, Noriyuki Kida²
Tomoaki Sakai¹, Masaki Takeda¹

This study discuss the significance of establishing and tasks of the management of cheer leading circle as a one of activity of Kyotanabe-doshisha Sports Club. Cheer leading class has been held before the starting cheer circle. In this class, as a result of questionnaire, teaching cheer to child and exhibition of cheer from the participants were very successful and participants and their parents have satisfied very much. Participants hoped to continue the cheer reading activities and develop cheer leading circle. It is desirable to give an opportunity to have exercise for children as a regular basis. Then authors tried to start cheer leading circle. However, there were several tasks to be resolved to start the circle. Particularly, securing the facilities to play and capable students and funding including running costs were the most important tasks for resolved. However, it is suggested several designs and ideas make it possible to managing cheer circle.

【Keywords】 community sports club, cheer leading, a personal network

本研究は、京たなべ・同志社スポーツクラブにおいて運営されている3つのサークル活動の1つであるチアリーディングサークルについて、サークル立ち上げの意義と2年間にわたって運営してきた運営上の諸課題を論じたものである。サークル開始前に行ったチアリーディング教室では充実した指導と演技発表を行うことができ、満足度も高かった。その教室の受講児童や保護者から期間の延長やサークルとしての活動が要望されたため、また、定期的な運動実施の機会を与えることが総合型スポーツクラブの理念の一つであるため、サークル活動の立ち上げを試みた。サークル活動は単発的ではなく、定期的に行うことから、課題として浮かび上がったことは、大学の施設利用に伴う実施場所の定期的確保である。さらに、定期的に可能な指導者学生を如何に確保する、さらには、大学内への車の乗り入れなど、入校許可をいかにとるかがあげられた。重要な運営費に関しても、赤字にならない参加費用設定などは課題となった。しかし、これらの課題は方法を工夫することにより解決でき、サークル活動の運営が可能であることが示された。

【キーワード】 総合型地域スポーツクラブ, チアリーディング, 人的ネットワーク

I. はじめに

総合型地域スポーツクラブである「京たなべ・同志社スポーツクラブ（以下KDSC）」が2008年4月に設立された。KDSCではスポーツ教室を中心にスポーツ教室後の自主運営によるサークル活動も展開し、

2009年9月現在では9つの教室と3つのサークルが開催されている。

総合型地域スポーツクラブの設立に向けて、2006年にKDSC設立準備委員会が作られ、2006年と2007年の2年間に5つのスポーツ教室が開催された。その中で、参加者が多かった中高齢者のノルディック

1 同志社大学スポーツ健康科学部 (Faculty Health and Sports Science, Doshisha University)

2 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 (Graduate School of Science and Technology, Kyoto Institute of Technology)

ウォーキング教室が2006年12月にサークルとして立ち上げられた。次いで、チアリーディング教室（以下チア教室）の参加者からなるチアリーディングサークル（以下チアサークル）が設立された。総合型地域スポーツクラブにおいては、スポーツ教室の開催に留まるだけでなく、自主運営に基づくサークル活動の展開が、求められる。スポーツ活動の習慣化は総合型地域スポーツクラブ設立の本来の趣意に添うものであり、積極的なサークル設立と運営が望まれるところである（竹田，2009）。

本稿ではスポーツ教室としてのチア教室開催からチアサークル立ち上げまでの経緯とチアサークルが立ち上がった後の約2年間の運営の中から見えてきた問題点や利点を見渡すことによって、チアサークルの立ち上げの意義、さらには運営のための課題をまとめることとした。

II. サークル設立に至る過程

1. チア教室からチアサークルへ

チア教室は「（仮称）京たなべ・同志社スポーツクラブ設立準備委員会」の事業の一環であり、当初よりサークルとして持続的な活動につなげることを念頭において実施された。

チア教室は、京田辺市で開催される小学生スポーツ大会の応援をはじめ、大学や市のイベントにおいてチアリーディングの発表を行うことによって、児童らが協力して目的を達成する喜びを体験する機会となるよう2006年より開催されてきた。高橋ら（2009）が示したように、チア教室では充実した指導と演技発表を行うことができ、多くの受講希望者があった。さらに、チア教室に参加した児童におこなったアンケート調査

からも非常に高い満足度であったことが伺える。教室の受講児童や保護者から期間の延長やサークルとしての活動が要望され、京田辺市からもサークルとしての運営が提案された。そこで、京田辺市や同志社大学スポーツ支援課など総合型地域スポーツクラブの立ち上げに関係する各団体を交えてサークルの設立に向けた準備を進めた。

2. サークル化への課題

チアリーディングは誰もが気軽に参加できるスポーツではなく、芸術的な要素も含まれているスポーツである。また、発育発達期の児童を対象とするキッズチアリーディングを行うためには、充実したプログラムを組み、経験豊富な技術指導者やレッスン場所の確保などしっかりした運営システムを構築することが重要となる。チア教室の場合は1年間に10日程度の開催であったが、サークルとして継続的に開催する場合には活動日数の大幅な増加が予想されたため、様々な課題を解決する必要があった。

課題としては、大学が関係する事項としては、施設使用が可能であるか否か、人や車の入構が可能であるか否かということであった。チア教室のレッスンはすべて大学内の施設で実施されていて、サークルとして活動するためには定期的に小学生とその保護者が大学構内に入る許可を得ることや練習場所を確保することが課題であった。京田辺市が関係する事項としては、活動日数の増加に合わせたイベントなど成果発表の場を確保することが課題であった。

さらに運営側の観点から、同志社大学応援団チアリーダー部（以下チアリーダー部）学生からなる指導スタッフの確保が課題であった。チア教室では学生が指導スタッフとして教室運営や行事に参加していたが、サークルとして活動日数が増えると、学業や自分

表1 指導スタッフ

役割・担当	職業	年齢	指導歴			年数	競技歴
			キッズ	一般	シニア		内訳
統括・準備	教師	58	20年	36年	3年	15年	クラシックバレエ6年、体操競技9年
レッスンリーダー	学生	24	3年			4年	チアリーディング4年、ダンス研修中
応援企画	会社員	28	1年			12年	チアリーディング4年、社会人アメフトチームチアリーダー5年 社会人競技チア3年、社会人バスケットチームチアリーダー
応援ダンス製作	会社員	28	1年			9年	チアリーディング4年、社会人アメフトチームチアリーダー5年
基礎レッスン	主婦	38	2年		2年	7年	チアリーディング4年、社会人アメフトチームチアリーダー3年
補助	会社員	24	6年			4年	チアリーディング4年、社会人競技チアチーム所属
補助	会社員	27				9年	チアリーディング4年、社会人アメフトチームチアリーダー5年 社会人バスケットチームチアリーダー
補助	会社員	28	6年			4年	チアリーディング4年
補助	学生	23	1年			4年	チアリーディング4年、社会人バスケットチームチアリーダー
備品製作・音楽編集	看護婦	24	2年			4年	チアリーディング4年

表2 指導スタッフへの指導内容

-
- ① 挨拶の習慣をつけること。チアリーダーとしての礼儀作法の徹底と応答の指導をする。
 - ② 毎回のレッスン日のスタート時に、練習内容や目標などを、明確にしてレッスンに入ると効果的であるので、説明や完成時の動きを提示する。レッスン時の音楽やチア曲も聞かせ、動きのアクセントなどを明確に指示する。
 - ③ ストレッチング、補強的な筋力トレーニングは意識的に取り組めるよう部位の指摘と方法を徹底する。
 - ④ チアの基礎技術であるモーション・ジャンプ・ステップ・キック・ポーズなど個人的な能力は、カウントで反復練習させ、その後音楽を使って一連の動きの中に入れ、全員で楽しくできるよう工夫する。
 - ⑤ リズミカルな動きの習得のためのカウントの数え方を指導し、声を出しながら動く習慣を身につけさせる。
 - ⑥ グループとして動くため、常に自分の位置と他の人の位置を確認させ、位置感覚を身につけるための集団練習を多く入れる。
 - ⑦ 技術レベルに差が出る場合や、つまづいている箇所などの特別レッスンは、少人数でのグループに分かれて指導する。
 - ⑧ 技術的にも年齢的にも差がある子どもたちであることと、思春期に入る前の子供達であるため、練習中に問題が生じたときは役割を分担し対応できるように配慮する。指導中は全員に均等に声をかけ、位置取りや動きの違いを工夫して構成を組む。
 - ⑨ 怪我や、体調不良による見学者には、各自のチアノートに練習内容を記録させる。
 - ⑩ チア曲は、イベントや応援の目的に合った音楽を選び編集する。現代調のヒップホップから、誰にでも親しみのあるディズニー曲、ポップスなどを幅広く使用しオリジナルな曲を制作する。子供達は、一連の流れの中でストーリー性のあるダンスが好きなので、作品を工夫する。曲のテンポや、繰り返し、効果音などが入っていると覚え易く、動き易いので、その点も工夫し、演技構成をする。
-

たちの部活動の練習時間確保など学生への負担が大きくなり、また学生スタッフへの事前研修の時間の調整も大変困難となる。したがって、学生スタッフの負担を増やさずに指導にあたるスタッフ（以下指導スタッフ）をいかに確保するかということが、重要な課題であった。

3. 課題の解決・克服

チアサークルを設立するための課題解決に向けて、総合型地域スポーツクラブ設立準備委員会を中心とした個人の力による働きかけによって取り組みが進んでいった。チアサークルでの練習場所は、大学の協力により大学施設を使用できることになった。デーヴィス記念館を使用するスポーツ系のサークルや体育会との交渉や調整によって、毎週土曜日の同じ時間帯に大学の施設を使用できるようになった。この際、学生支援センタースポーツ支援課の職員が大きな役割を果たした。入構許可に関しては、保護者の車で送迎のための駐車スペースと入構許可証の発行も確保できた。この件に関しては、大学総務部、施設部、およびスポーツ支援課の職員が大きな役割を果たした。

発表の場については京田辺市教育委員会より機会を提案された。また、チア教室開催時にチアサークルも同時に開催し、デモンストレーションをすることで発表の機会を増やした。

指導スタッフに関しては、現役学生以外にチアリーダー部の卒業生（以下OG）から10名のスタッフを確保し、レッスンには3～4名が参加して連携をとりながら指導することにした（表1）。

指導スタッフは卒業後も競技を継続し、選手としてチアリーディング選手権大会に出場していた人や、社会人野球やアメフトなどのチアリーダーをつとめていた人など技術レベルは非常に高いものであった。しかし、体育教師やスポーツ指導の専門家ではないために指導経験が少なく、特に児童に対する指導力も不十分であった。そこで、指導スタッフを対象とした事前指導研修を実施し、共通の指導方法を作成した。指導方法を研修によって統一し、練習計画や練習記録を共有することで急な指導者の変更にも対応できるようにした。

具体的な研修内容は①KDSCの概要、②チアサークルの目的・年間スケジュールなどの確認、③チア技術指導マニュアルの作成・発表用ルーティンの作成、④キッズ指導の方法の統一であった。表2に、具体的な指導方法を示した。

4. チアサークルの設立

2007年度の前期チア教室から、チアサークル設立に向けた継続的な準備を始めた。2007年12月に2008年度のチア教室の実施案に関する打ち合わせを大学、京田辺市、KDSC設立準備委員会事務局と行った際にチアサークルを設置する可否を検討した^{注1)}。年間30日程度であれば可能と判断、KDSC設立準備委員会にチアサークル設置の企画書を提出し、KDSC設立準備委員会においてチアサークル設置が決定され

^{注1)} 大学スポーツ支援課とKDSCの竹田と事務局とチア講師高橋で話し合った。

た(2007年12月27日)。

2007年度後期のチア教室(2008年2~3月)の際にOGがチア教室のレッスンを見学し、指導スタッフの育成準備に取りかかった。チア教室終了後に、チアリーダー部部会とOG総会(3月)において正式にOGに対して協力の要請を行った。2008年4月25日のKDSC設立総会にてチアサークルの設立が承認され、2008年5月31日に活動を開始した。

チアサークルでは、チア教室を終了した児童を対象としてチア教室の体験を踏まえて、より高度な技術の習得と体力の向上を目指した。また、応援することの意義やチアリーディングに関する知識を習得させるため、チアリーダーとしての礼儀作法や役割などの解説や仲間意識なども練習中に組入れて講義形式で説明することとした^{注2)}。チアサークル部員には、3つの目標を持たせた(表3)。

チアサークルだけでなく、チア教室も継続的に開催し、チアサークルは、チア教室との関連性をもたせ、発展的に展開していくよう工夫した。

表3 チアサークルでの3つの目標

- | | |
|---|---|
| ① | チア教室での模範的な役割を与え、チアサークルでの技術練習の成果を発揮して、リーダー的な存在になること。 |
| ② | 地元のイベントに発表できる場を設定し、地域に愛されるチアリーダーになること。 |
| ③ | 出来る限り多様なスポーツ応援を行い、他のスポーツへの関心を持つこと。 |

Ⅲ. チアリーディングサークルの活動

1. 設立初年度(2008年度)

1) 概略

チアサークルは、イベントなどでの演技発表に向けて、週に1回の頻度でダンスや応援ルーティンのレッスンを実施した。5~7月を前期、10~12月を中期、1~3月を後期として、10回およそ3ヶ月を1期とし、年3期開催した(表4-1)。レッスンは同志社大学デーヴィス記念館のフェンシング場、ハローホール、盤上館多目的実習室などで実施した。

^{注2)} チアリーディングの基礎技術として、笑顔や声、アームモーション、アテンション、クラップ、前後方向や左右方向などの立ち方、ダンスプログラムの知識、オープニング入場~ラスト退場部分までの動き方の説明、スタンプ、ボム文字、ボードを上げるタイミング、ボム・小物などの作成と使い方の注意、イベントやスポーツチームなど応援する目的と心得を説明した。実際の名前のコール練習をした。移動などのカウントの取り方を説明し、位置表を作成した。動き方のカウントを全員で確認、徹底するなどであった。

2) サークル部員

チアサークルは専門性を持った学習要素も含むため、チア教室に参加した、京田辺市在住の小学4~6年生とした。定員を30名として2008年5月に部員を募集したところ、9名の参加希望があった。

募集に関する広報活動は、案内チラシを京田辺市の全小学校に配布し、京田辺市が年4回全戸配布している「学びの情報誌」に案内を掲載し、京田辺市のウェブサイト上にも情報を公開した。KDSCチア教室の最終日にサークルの案内も行った。

3) 活動内容

サークル開設の初日は講義室でミーティングを実施した。全員が自己紹介を行い、サークルの目的や保護者の協力体制、練習日程や連絡網の確認、大学構内の説明などを行った。チアリーディングのテキストと練習用Tシャツを配布し、目標となる発表演技の説明と指導スタッフの紹介を行った。その後、児童はレッスン会場に移動してレッスンを開始し、保護者はKDSC事務局の職員による事務的な手続きや会費の納入などを行った。

2回目以降は、午後1時30分から3時までの90分間のレッスンを行った(表5)。レッスンは、基本的な技術練習、発表用ダンスの練習、補強的な体力トレーニングの3つを行った。はじめに挨拶や出席確認を行い、今日の目標となる音楽に合わせた動きの模範を見せた。次にウォーミングアップやステップなど基礎練習を行い(約15分間)、カウントに合わせた部分的な練習を行った(約30分間)。休憩後、実際の曲にあわせて通しの練習を行い(約10分間)、できなかった部分や合わせにくい部分の練習を行った。発表用ダンスの習得にはレベル差があるため、数名のグループに分かれ個別に指導を行った後、全体で合わせた。最後に全員で腹筋やスクワットなどのトレーニングを10分間程度行った。終わりの挨拶時に来週の目標や練習内容を伝えた。

前期10回のうち5回はチア教室との共同開催であり、チア教室の受講生に対して見本となるようにチア教室の初日にはデモンストレーションを行った。また、チア教室と合同で全国小学生ハンドボール大会の開会式で演技を行った(表6)。発表後は全員が参加してミーティングを行い、感想やコメントを述べ合い、次へのステップアップとした。

応援ルーティンの演技構成内容は、オープニング曲によりチアリーダーがボードを持ち、軽快に踊りながら入場し、全員がボムで文字を作ったり、位置移動をしたりしながらのスタンプを入れたオリジナルダンスを踊り、最後は大会選手やイベント参加者への応援コールを行い、ポーズを決めるものであった。

表4 年間スケジュール

表4-1 2008年度の年間スケジュールおよび参加人数

	前期	中期	後期
1	5/31(土)	9/27(土)	12/20(土)
2	6/07(土)	10/04(土)	● 12/21(日)
3	6/14(土)	10/11(土)	1/10(土)
4	6/21(土)	10/18(土)	1/17(土)
5	6/28(土)	● 10/25(土)	● 1/24(土) 教室
6	● 7/06(日) 教室	● 11/01(土)	1/31(土) 教室
7	7/13(日) 教室	11/08(土)	2/07(土) 教室
8	7/19(土) 教室	11/15(土)	2/14(土) 教室
9	7/26(土) 教室	11/22(土)	● 2/21(土) 教室
10	● 8/01(金) 教室	12/06(土)	2/28(土)
11			3/07(土)

4年生	4人	5人	5人
5年生	5人	8人	8人
6年生			
合計	9人	13人	13人

表4-2 2009年度の年間スケジュールおよび参加人数

	特別期	前期	中期	後期
1	4/11(土)	● 7/05(日) 教室	10/24(土)	1/09(土)
2	4/18(土)	7/11(土) 教室	● 10/31(土)	1/16(土)
3	4/25(土)	7/18(土) 教室	11/07(土)	1/23(土)
4	5/02(土)	7/25(土) 教室	11/14(土)	● 1/30(土) 教室
5	● 5/05(火)	● 7/29(水) 教室	11/21(土)	2/06(土) 教室
6	5/30(土)	8/10(月)	11/28(土)	2/13(土) 教室
7	6/06(土)	● 8/17(月)	● 11/29(日)	2/20(土) 教室
8	6/13(土)	10/03(土)	12/05(土)	● 2/27(土) 教室
9	6/20(土)	10/10(土)	12/12(土)	3/06(土)
10	6/27(土)	10/17(土)	12/19(土)	● 3/13(土)
11			● 12/20(日)	

4年生	1人	11人	11人	11人
5年生	5人	6人	6人	6人
6年生	8人	9人	9人	9人
合計	14人	26人	26人	26人

●は発表(表6参照)をおこなったことを示す。「教室」はチア教室との合同開催であったことを示す。

表5 毎回のタイムスケジュール

(A) 一般的な練習日

13:00~	指導スタッフ集合、打ち合わせ、指導内容の確認とダンス練習
13:30~	サークル生集合 出席確認 挨拶 本日の目標確認 ウォーミングアップ、ストレッチ、エアロビクス、チアの基礎練習
14:00~	ダンス(目標にあわせたもの)練習
14:50~	補強(筋肉トレーニング)クールダウン
15:00	終了 挨拶

(B) スポーツ応援(アメフト)

試合開始 1時間前集合	挨拶、出席確認ウォーミングアップ、ストレッチ 発表用ダンスの合わせ
試合中	指導スタッフの誘導で、攻守交替に合わせて、応援ダンス
試合終了 (ハーフタイム)	観客と選手に挨拶、片づけ、終了

(C) アダム祭(学内イベント)

9:00～	スタッフ、サークル生集合 挨拶 控え室にて、ミーティング
9:20～	ウォーミングアップ、ストレッチ、発表ダンス練習
9:45～	舞台裏 集合、イメージトレーニング
10:00～10:15	発表ダンス
10:20～11:00	控え室にて、クールダウン ミーティング 挨拶 解散

(D) 大御堂十七夜(学外イベント)

15:00～15:50	スタッフ、サークル生集合、挨拶 本日の内容の打ち合わせ 同志社大学チアリーダー部員と合同ウォーミングアップ
16:00～16:50	会場へ移動、会場でのリハーサル、控え室でのイメージ練習
17:00～17:20	発表ダンス
17:30	会場にて、ミーティング、挨拶 解散

(E) KDSCチア教室合同練習

9:30～	スタッフ、サークル生集合、挨拶 ミーティング 目標確認 ウォーミングアップ 発表用ダンス練習
10:00～	教室生集合 挨拶 全体でのウォーミングアップ 教室の説明
10:20～	サークル生の模範演技
10:30～11:00	グループに分かれての練習
11:00～11:20	サークル生、チア教室合同であわせての練習
11:20～11:30	全体でのクールダウン 次回の説明 挨拶

表6 成果発表の場

開催日	イベント名	主催	会場
2008年度	7/6 KDSCチア教室デモンストレーション	KDSC	同志社大学ハローホール
	8/1 全国小学生ハンドボール大会	京田辺市教育委員会	田辺中央体育館
	10/25 京田辺スポーツフェスティバル	京田辺市教育委員会	田辺中央体育館
	11/1 同志社大学アダム祭	同志社大学	同志社大学
	12/21 同志社大学ブンドー・キッズ	同志社大学	同志社大学デーヴィス記念館
	1/24 KDSCチア教室デモンストレーション	KDSC	同志社大学ハローホール
	2/21 京田辺市小学生ハンドボール大会	京田辺市教育委員会	田辺中央体育館
2009年度	5/5 KDSCキッズアメフト紅白試合応援	KDSC	同志社大学アメフト場
	7/5 KDSCチア教室デモンストレーション	KDSC	同志社大学ハローホール
	7/29 全国小学生ハンドボール大会	京田辺市教育委員会	田辺中央体育館
	8/17 普賢寺大御堂十七夜ステージ依頼	京田辺商工会	普賢寺観音寺
	10/31 同志社大学アダム祭	同志社大学	同志社大学
	11/29 山城ファミリー文化フェスティバル依頼	山城教育局	宇治文化ホール
	12/20 同志社大学ブンドー・キッズ	同志社大学	同志社大学デーヴィス記念館
	1/30 KDSCチア教室デモンストレーション	KDSC	同志社大学ハローホール
	2/27 京田辺市小学生ハンドボール大会	京田辺市教育委員会	田辺中央体育館
3/13 子育て支援『おてつないで』依頼	京田辺市社会教育	田辺中央公民館	

中期になると4名が新規入会し、13名で8回のレッスンと2回の発表を行った。発表は京田辺市のスポーツフェスティバルと同志社大学アダム祭の開会式であり、発表会場で行われている行事にもできる限り参加して交流を図った。後期は8回のレッスンと2回の発表であり、発表は京田辺市ハンドボール大会での開会式と同志社大学で行われる学生と地域の連携によるスポーツイベント「ブシドー・キッズ」の開会式であった。チア教室との合同開催もあったためチア教室用のルーティンの発表も教室の初日に行った。

その他に、公式なサークル活動外で保護者が主催となって、サークル部員と保護者、指導スタッフ、KDSC事務局との親睦を兼ねた交流の機会を持った。

4) チアサークルの運営体制

チアサークルを運営していくための活動は大きく分けて技術指導、渉外・広報、サークル庶務、道具、会計の5つであった。初年度は、チア教室において技術指導を担当していた講師（以下チアサークル講師）やKDSCの事務局職員など個人が中心に運営し、保護者が支援する形であった。

技術指導としての活動は、演技の構成を練り、練習計画を立案し、レッスンでの指導を行い、練習記録を残すことであった。また、OGらによる指導スタッフの日程管理も行った。毎回のレッスンはチアサークル講師と指導スタッフによる指導体制で実施され、チアサークル講師は指導全体を統括し、振り付けの作成や指導スタッフへのアドバイスなどを担当した。指導スタッフは、サークル部員への演技指導や振り付けや作品の流れなどの考案と実際のチアの技術指導を担当した。

渉外としての活動は、大学スポーツ支援課を通して体育系サークルと日程を調整して練習場所を確保すること、および発表に向けて京田辺市や大学、大学体育会と打ち合わせを行うことであった。広報としての業務は、サークル部員を確保するために、広報誌等に掲載依頼を行い、KDSCへレッスン場所、発表日、発表場所などを連絡することであった。渉外は主にチアサークル講師が担当し、広報はKDSCの事務局職員が担当した。

サークル庶務としての活動は、サークル部員の送迎時の注意や健康管理に関する注意などを保護者へ依頼することや、小学校の行事予定を把握し日程の調整やサークル部員の名簿作成、連絡網の作成、練習日や練習場所の管理、指導スタッフの変更や学校行事による欠席者の把握、発表日の注意事項などの諸連絡などであった。サークル庶務もチアサークル講師が担当し、年度の途中から保護者も手伝うようになった。

道具としての業務は、発表で使うボードやボードを

運搬するための袋の縫製、旗のデザインを考案し作成することであった。最初は指導スタッフとチアリーダー部学生に手伝ってもらいチアサークル講師が担当したが、年度途中からは、保護者が中心に取り組むようになった。また、レッスン時の音楽機器の準備や備品の出し入れは指導スタッフとチアサークル部員と保護者の有志で行った。練習用ボムはチアリーダー部学生が管理した。

会計としての活動は、KDSC会費やチアサークル会費を集めることと支払いに関わる業務であり、チアサークル講師とKDSCの事務局職員が担当した。

チアサークルの収入は84%がチアサークル部員からの会費であった。サークル部員の会費は、1期あたり1人10,000円であり、年間30,000円であった。30,000円を一括して集めると途中での入退会の扱いなどについて問題があるため、民間のスポーツクラブの運営方法を参考にして、約3ヶ月で10回のレッスンを1期として、前中後期それぞれ10回で10,000円とした。

指導スタッフ一人1回あたりの謝金は、2008年前期および中期は2,000円、後期が3,000円であり、交通費は個人負担であった。チアサークル活動の経費の75%が指導スタッフの謝金であり、その他の経費には小物やボードの製作費用や音楽関係の備品にかかる費用であった。チアサークルの会費だけでは、赤字になるので、KDSCからの補助金などの支援によって運営が成り立つ状態であった。練習と発表用に着用するTシャツ代1枚2,000円などはサークル部員の実費負担であり、そのほかにチアサークル部員はKDSCの入会金1,000円（保険代含む）を負担した。

2. 設立2年目（2009年度）

1) 活動内容

2年目の活動は、新規のメンバーを迎えて6月から実施する予定であった。しかし、初年度の活動終了時に、部員や親から、「もっとたくさん練習をしたい」「新規の受講生が入会する6月までの間も活動を続けたい」との希望があった。そこで、初年度のチアサークル部員13人による特別レッスンを4月から6月にかけて10回実施した（表4-2）。

2009年5月に新規チアサークル部員を募集し、13名が加わり26人で前期のチアサークル活動を実施した。発表はチア教室でのデモンストレーションと全国小学生ハンドボール大会、普賢寺大御堂十七夜（写真1）であった。

中期も26人で10月から12月までの10回の活動を行った。発表は、チアリーダー部と合同のアダム祭開会式（写真2）とやましろファミリー文化フェスティバルであった。後期も同じく26人で1月から3月ま

で10回行った。発表は京田辺市小学生ハンドボール大会と「ブシドー・キッズ」、京田辺市子育て支援「おててつないで」であった。KDSCに新しく設置されたキッズのアメフトサークルから試合の応援依頼(写真3)も入り、結果として4期で40回の活動となった。また、レッスン以外にミーティングや同志社大学の新生歓迎イベント(4月)や同立戦野球応援(5月)など大学チアの応援見学なども実施した。

2) チアサークルの運営体制

初年度の活動終了時にチアサークル保護者会を作り、会長、副会長、会計を選出した。また、保護者と

スタッフによってチアサークル規約を定め(2009年4月)、チアサークル事務局を設置した。チアサークル事務局の会長、副会長、会計は保護者がつとめ、チアサークル講師が顧問的な役割をつとめた。

2年目に入ると、保護者間の結束も徐々に強くなり、運営への協力がみられるようになった。保護者会としてチアサークル講師とミーティングを行い、チアサークルを運営する上での役割が分担されるようになった。レッスン時に保護者がミーティングを行い、(写真4)京田辺市や地域との打ち合わせや、チアサークル部員への連絡、発表前の準備やチアサークル部員の



写真1 普賢寺大御堂十七夜での発表風景



写真4 サークル保護者の協力(ミーティング)



写真2 同志社大学アダム祭サークルメンバーと指導スタッフ



写真5 サークル保護者の協力(小物製作)



写真3 キッズアメフト紅白試合の応援練習風景



写真6 サークル練習風景

引率、参加費の徴収・管理、発表時のユニフォームの決定・製作、小物の製作と管理（写真5）など、チアサークル庶務や道具に関する運営の大半を保護者が担当するようになった。

初年度はチアサークル講師が庶務や会計などの運営も行っていたが、チアサークル講師は、レッスンでのチア技術の指導、発表会の企画運営に専念することができた。レッスンでは、チアサークル講師と3名のOGスタッフによる4人体制で指導（写真6）し、発表やイベント時にはその発表のスタイルに合わせて、チアサークル部員の引率や雑用などに2名の補助スタッフが加わるようにした。

2年目になると、会計は保護者が担当した。チアサークルの収入に関しては、保護者会からの提案によって2009年4月から年会費を1期12,000円とした。支出に関しては、指導スタッフの謝金が2009年4月から1人1回あたり交通費を含めて5,000円となった。この金額は、KDSCの教室事業による教室講師の謝金（5,000円）と学生スタッフの謝金（3,000円）を参考にして保護者会からの提案に基づき事務局にて決定した。

V. 考 察

1. サークルの成果

チア教室を2年間にわたり開催し、その中で試行錯誤を重ねながらチアサークルの立ち上げにつなげ、現在、チアサークルとチア教室の活動を継続している。その中から生まれたと思われる現段階での成果をまとめる。

1) 身体的健康づくりへの貢献

チアサークルでは、各期に2回程度の発表の場を設けている。発表が目標となり、体調を整えたり、規則正しい生活を心がけたりすることによって、発表当日に病気が原因での欠席者は1人も出なかった。また、チアサークル活動中に大きなけがに至る事故も発生していない。さらに、雨天の中でのアメフト応援をもこなし、児童が元気に身体を動かす機会をチアサークルとして提供できたと言える。

また、チアサークル部員の中には、毎日柔軟性を強化するためのストレッチを行っている者や栄養面に気を配った食生活を考えるようになった者もいる。このように、運動の継続や身体作りに関する興味を児童を含めて保護者にも持たせることができたと思われる。

2) 人と人との交流

集合時間より30分以上も前に会場へ到着する親子がいるなど、大学に来ることを楽しみにしている様子がかがえた。また、祖父母を含めた家族全員の見学も

あり、「孫がいつもお世話になります」と嬉しそうに声をかけられることもあった。発表日には、大勢の家族が集い、イベントも楽しんで参加している。このようにチアサークルがきっかけとなって家族内で人と人とのつながりを構築する機会となっているようにみえる。少子化や核家族化といった社会の流れの中で、家族のつながりを再構築する場として期待できるのではないかと考えられる。

また、チアサークル部員は京田辺市の9つの異なる小学校に通い、1週間に1度集まってレッスンを受けるだけの仲間である。しかし、数回目のレッスンには、部員同士がニックネームで呼び合うようになり、ラプリーエンジェルスというサークル名を親子全員で決め、グループ練習時やトレーニング時には、声を掛け合い、助け合うようになった。子ども同士が仲間を作り、社会性を涵養する場としての効果が期待できると言える。

さらに、保護者が活動の趣旨を理解し、運営に協力するようになってきた。地元であるため、地域の行事を熟知している点もプラスに働いていると言える。また、保護者の中には卒業生や職員、兄弟に同志社大学と関係がある人も多い。このように人と人との交流のきっかけとなるという点において、地域への貢献が大いにあると言える。

3) 大学生と市民の交流

学生スタッフとしてチア教室での指導を経験した者が卒業後、社会人となり、チアサークルの指導スタッフになりたいと希望し、活動に意欲的に参加している。そのうち1人は、仕事として確立することを模索している。また、2名の現役の学生が卒業後にチアサークルの指導を手伝いたいと考えている。

学生がチア教室で指導者として参加した経験を生かして、指導するだけでなく、クラブ運営にも参画できるようにすることも望まれる。このことは、学生にとっての社会に出るための実務経験として大変意義深いと言える。

2. サークルの安定的運営の要因

高橋ら（2009）は、チア教室の満足度が高かった要因として①施設等の環境整備、②発表の場の設定、③地元住民のニーズ、④指導スタッフの役割の4点を挙げている。今回、1年間の活動日数が2倍以上に増加し、これらの点を維持することができるか心配されたが、チアサークルが設立されてからの2年間をふり返り、ほぼ順調な運営を行うことができた。そこで、課題を解決し、安定的に運営を継続することができた要因について以下に整理する。

1) 個人の力、人のつながりがもたらすもの

2009年の4月にはチアサークル部員の要望もあり

レッスン回数を増やすことができた。そのほか今回のチアサークルの運営では、状況に応じて対応することができた。この背景には、チアサークルにおいて個人の力に依存した形で運営されている点を指摘することができる。この点に関して、チアサークル2年目までの活動では、チアサークル全般の運営と管理を担当したチアサークル講師が人的ネットワークのハブとして有効に機能したと言える。

チアサークル講師は、KDSCの理事であり、同志社大学の嘱託講師であり、地元住民であり、京田辺市の社会体育関係の仕事に関わり、地域子育てプランナーなどの立場にあった。したがって、それぞれの分野で多岐にわたり支援者を得ることができたため円滑なサークル活動を実施することができ、成果を挙げられた可能性が考えられる。

具体的な例としては、KDSCの会長でもある同志社大学教員からは、大学の関係者との交渉やスポーツ健康科学部の施設確保といった面でサポートを得た。スポーツ支援課職員は、スポーツに理解ある人が多く、行事に好意的であった。KDSC事務局の職員は、総合型地域スポーツクラブ設立準備期間より京田辺市社会教育機関との交流を持ち、信頼関係を築いており、現場でよく動き、実務として大きな役割を果たした。

2) 教室とサークルが併存であったこと

KDSCの設立準備期間中からのチアリーディング事業（チア教室）が土台として存在し、チア教室の体験者をチアサークルが受け入れ、チア教室とチアサークルを併存させる形で運営を行った。したがって、チアサークル部員はチアリーディングが好きだけでなく、チアリーダーとしての心得を持ち、意欲的であるという点で、技術的に足並みが揃っていたため円滑な活動ができたと言える。さらに、指導者とチアサークル部員および保護者は、初対面ではなく、施設や場所なども理解していることにより、チアサークルが活動する上での円滑な運営につながったと考える。また、小物や道具、音楽テープ、デッキやビデオを共有し、経費を節約することもできた。

チアサークル部員には、チア教室において教室の受講児童に対してのリーダー的な役割を要求した。チアサークル部員自身が学びつつ、見本となることで成長を促すことを意識した。今後、低学年でチア教室に参加し、高学年になってからチアサークルに加入するといった、継続的な活動という流れも考えられる。このように、児童の成長環境を構築することも可能であると思われる。

3) 技術指導者の確保

他の総合型地域スポーツクラブから、チア教室の開催に関する相談や見学希望があり、実施のためのヒン

トや指導スタッフの紹介を頼まれることがある。このことは、スポーツクラブにおいてチア教室を開催するには、指導スタッフの確保が課題となっていると考えられる。

そのような状況の中で、本サークルでは指導スタッフをうまく確保することができ、そのことによってよいサークル運営につながったと考えられる。現役学生であるチアリーダー部が核となりOGをその活動に動員する形で連携を取り、サークル化を達成することができた。指導スタッフがチアリーダー部のOGであったという点において、同志社大学や京田辺市に対する帰属意識を有しており、精力的な協力が得られたのではないかと考えられる。

3. 今後の課題

チアサークルが安定的に運営された要因としては上述したように、3点が挙げられるが、同時に今後に向けた課題も多く残されている。高い満足度を維持し、持続可能性を高めるための課題を以下で整理する。

1) 費用

2009年には演技発表の依頼が増え、サークル部員からも多くの活動機会を望む声があるため、活動日数が増加した。活動日を増やすと指導スタッフに対する謝金の合計金額も増加するため、会費を上げざるを得ない状況になる。したがって、チアサークル部員の保護者の家計への負担を考慮し、年間のレッスン回数は30回程度に抑えている。チアサークル部員の要望をかなえ、充実した指導を確保するためには、年間のレッスン回数は、40回程度が理想的であると思われる。しかし、現状では予算の関係で困難である。

備品にかかる経費の中では、消耗品であるボムが高額であるため購入することが困難であり、チア教室や同志社大学のものを借りて使用している。2009年12月になって、KDSCの予算としてボムが購入され、KDSCからサークルに貸与されるようになった。また、サークル部員のユニフォーム代は自己負担であり、既成のものは高額であるため、保護者が手作りで作ったものをイベントや発表の時は使っている。このように、これ以上支出を減らすことは困難である。

KDSCからの金銭的な支援があるため、現時点では赤字経営にはなっていないが、経済的に安定していないのが現実である。この点において、自治体やその他の団体からの金銭的援助をもう少し増やして貰えるような取り組みが必要と言える。KDSCの職員への謝金や応援やイベント会場へのチアサークル部員と指導スタッフの交通費や、小物・道具などの購入に使うことができればと考えている。

現時点では、大学の協力によって施設使用料がかからない状況で活動が行われているが、今後、他の施設

を使用することになったり、大学での施設使用料が有料になったりした場合には、大きな課題となると思われる。

2) 運営組織：個人の力にたよった運営

2つ目の課題として、KDSCや大学、京田辺市の運営に関する支援が弱い点を指摘することができる。現在は、チアサークル講師や保護者が中心となって、自主運営を行っている状況である。このことは臨機応変な対応ができる点では良いといえるが、組織運営としてのルールや運営体制などの基盤が弱く、今後、運営体制や組織の規則の確立などが必要となる。チアサークルを持続可能性の観点から考えると、個人の能力にたよるのではなく、組織として運営することが必要である。そのためにも役割の分担、責任の明確化、スタッフとして働く人材の安定的な確保などが挙げられる。

現在、チアリーダー部が中心となって指導者を確保し、KDSCによる施設の確保と大学による環境整備によって運営を行ってきた。チアサークルが今後よりよい運営をしていくためには、KDSCが核となり、大学と指導者と保護者の調整を行う必要があると考えられる。具体的には、サークルにおける指導スタッフの契約は誰が締結するのかという課題や、指導スタッフとKDSCの関係、事故が発生したときの責任などが現時点では曖昧であり、安心して取り組むためには明確に規定することも1つの方法といえる。この点においても、母体となるKDSCの果たす役割は大きいと考えられる。

3) 指導スタッフの力量向上

指導スタッフのチア技術は非常に高いといえるが、子どもの発達に関する配慮や関わり方や教育的側面についてはまだ未熟であり、指導や教育が重要である。地域の慣習や地元住民の特徴についても、地域に愛されるサークルを継続するためには関心を持たせる必要がある。

指導スタッフが指導スキルを向上させるためには、サークル部員の名前を覚えて、ニックネームなどで呼ぶことができるようにすることや、保護者とのミーティングなどを行い運営に関する協力を得て、レッスン以外の雑用を気持ちよく支援してくれるようにすることも大切である。また、複数の指導スタッフがいるため、教えることは共に学ぶことであるという謙虚な気持ちで、日々向上心を忘れず、スタッフ間でのミーティングを頻繁に行い、意見交換をすることが重要である。指導者の役割分担や指導システムの強化、連携などが必要である。しかし、指導スタッフの確保という観点では、ある程度の確保はできそうであるが、お金を捻出することが出来るかという不安もある。現在の謝金の範囲内ではそこまで指導スタッフの熱意が続

くかも不明である。指導スタッフからは、仕事として実施できるようになることが望まれている。スタッフになりたいという動機づけを金銭的なものに依存するのではなく、やりがいや自己実現、地元への貢献、社会貢献などによって指導をおこないたいという環境作りが今後の課題と言える。

4) 大学や学生にとってのメリット

市民が学生と触れ合いながらスポーツに親しみ活気ある地域づくりをめざし、同時に学生の資質向上に役立てることを念頭にKDSCはスタートした。現在、「大学と地域の連携によるスポーツクラブ」の特徴を表象するサークル活動になっていると思われる。地域と大学との連携したイベントでの発表や、チアリーダー部との合同ステージなどがKBSテレビで放映されるなどの広告効果もあったが、大学にとって直接的なメリットが少ないのではないかとと思われる点がある。

チア教室では、同志社大学チアリーダー部の部活動として学生スタッフが指導アシスタントをおこない、学生の成長環境となっている側面が非常に強い。しかし、チアサークルでは直接学生が指導や企画運営に携わっているわけではない。卒業生が母校の部活動を援助していくという点でわずかながらメリットはあると言えるが、明確な大学へのメリットがないと、事件や事故が発生したときに活動をすぐに縮小してしまうことがあるのではないかと考えられる。収益や宣伝効果だけではなく、明確なメリットがあれば、継続される可能性がある。大学に課せられた社会的活動、社会的責任と考えることもできる。

5) 学生主体による指導スタッフ

現役学生が指導者となることが、学生教育という視点でのKDSCの理念であるため、学生の関わり方として、OGに頼らずに現役学生が指導者となるためにはどうすればよいかは今後の課題である。

例えば、チアサークル運営に関してOGとの連携ができ、ある一定の流れが出来てくれば、時間の少ない学生でも指導スタッフとしての参入は可能であるかも知れない。あるいは、サークルの活動時間を再考するなど、学生に負担のかからない程度のサークル運営を考えなければならないかも知れない。

4. まとめ

2006年から2年間の準備期間を経て、京たなべ・同志社スポーツクラブが設立され、京田辺市と大学との連携を生かした特色ある総合型地域スポーツクラブが誕生した。地域の社会力と運営資金の施設などの面を提供する京田辺市と施設や場所などの環境整備と学生や指導者といった人的パワーの提供と運営資金の援助をする同志社大学が、協力関係を結び、一般市民が気軽に体験できる教室と、教室を体験したものがレベ

ルアップや運動の継続を意欲的に行っていくサークル活動を推進するスポーツクラブである。その1つでもあるチア教室から発展したチアサークルの立ち上げ初年度から2年間を経過した現在までの概要をまとめ、成果と今後の課題について考察した。

成果としては、身体的健康づくりへの貢献、人と人との交流、大学や学生と市民との交流が挙げられる。今回のサークル化の特徴として個人の力と人のつながりである人的ネットワークの重要性と準備期間からの教室からサークル化を見据えた展開方法と、指導スタッフの確保があげられる。今後の課題としては、費用、運営組織の強化が挙げられる。商業主義のスポーツクラブとは異なり、人と人が交流できる場、指導する側もされる側も共に学びの場となることが総合型地域スポーツクラブの特徴でもある。このような理念を達成するためのKDSCの運営方法、ならびにKDSC内の各種サークル運営方法に関して、さらに検討を進めたい。

謝 辞

本研究のチアリーディングサークル遂行にあたり、

同志社大学学生支援センタースポーツ支援課の職員の方々、スポーツ健康科学部の職員の方々、京田辺市教育委員会社会体育課の職員の方々、京たなべ・同志社スポーツクラブ事務局の藤原涼子氏には、多大なるご支援をいただきました。ここに感謝の意を表します。

参考文献

- 京都府教育委員会, 京都府スポーツ振興基本計画. 2004. 文部科学省「スポーツ振興基本計画」,
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/plan/06031014.htm
文部科学省総合型地域スポーツクラブ,
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/main3_a7.htm
日本体育協会. 総合型クラブ創設ガイド. こうして創った! こうすれば創れる! ハンドブック, pp1-3, 2008.
日本体育協会総合型地域スポーツクラブ <http://www.japan-sports.or.jp/local/index.asp>
高橋仁美, 来田宣幸, 坂井智明, 竹田正樹, 地域と大学が連携した総合型地域スポーツクラブとしてのチアリーディング教室の取り組み, 同志社スポーツ健康科学, 79-91, 2009.
竹田正樹, 「京たなべ・同志社スポーツクラブ」を例とした大学と地域連携による地域総合型スポーツクラブの提案, 同志社スポーツ健康科学, 61-70, 2009.